

西鉄甘木線の甘木駅が今年百周年を迎えることを知り、心からおめでとう、そしてありがたいと言いたい。

甘木線に乗り甘木駅が近づくと甘木川の手前で国鉄甘木線（現・甘木鉄道）と並行して走り始めるが、幼いころはそれがひとつの楽しみでもあった。終着駅であるとともに始発駅でもある甘木駅は、電車からホームに降り改札口を出ると右側にお手洗い、左側に喫茶店と旅館、道路をへだてて自転車預かり所や回転焼の店があり、よくお袋に買って貰ったのをかすかに覚えている。また私の幼き頃は、みい電車と呼んでいた様な気がする。電車の屋根には長いポールが付いた木造電車で、定かではないが運転手さんが天井から下がったひもを引きチンチンと今でいう警音器を鳴らしていた様に思う。だからチンチン電車とも言った気がするのだ。今はワンマン運行だが、当時は運転手さんの他に車掌さんが乗務し、がま口の黒いカバンを肩から下げ、切符を切るときのハサミをカチカチと鳴らして車内を行き来していたと記憶する。地域にどっしりと根付き、百年間の間一つひとつの駅を丁寧に走り続け住民の足として地方鉄道の役割を立派に果たしてくれていると感謝している。

私が利用していたのは甘木・馬田間が主だったが、今は亡きお袋に連れられ甘木の商店街や丸山公園の花見、甘木祇園山笠、甘木川の花火大会等々、懐かしい思い出がそっと目をつむると走馬灯のように駆け巡る。このほかにも忘れられない初恋の淡い思い出もある。そのころの私には声をかけたいがその勇気がなく、ただ同じ電車に乗れるだけで幸せな気持ちになれたものだった。今年七十七才を迎えたが、今でも甘木線に乗ると甘酸っぱい思い出とともに高鳴る胸の鼓動が今も聞こえる気がする。

いま私は甘木線の五代目ファンとなっている三才と二才のひ孫たちと近くの駅に出かけては、水色に赤いラインの入った電車とのふれ合いを楽しみながら遠き昔の思い出探しに出かけている。